書評　Paul Webster, *Consuelo de Saint-Exupéry* (Eds. du Félin, 2000 年)

コンスエロは甦るのか？

杉山　毅

本年が 1900 年 6 月 29 日生まれのサン＝テグジュペリの生誕 100 年に当たるというので，それを記念して，わが国でも主な書店の店頭にこの作家の作品やそれらを論じた評論の類が，装いを新たにして並べられている光景が見られたようであるが，果たしてどの程度の反響があったのだろうか。

ところで詩と批評の雑誌『ユリイカ』でも，この作家の特集号（7 月号）を刊行した。フランス語の現役教師を辞して久しく，閑居して不善を成しかねない怠惰な日々を過ごしていた筆者に，思いがけずこの特集号への執筆依頼があった。『手帖』の訳者として 30 枚ほどの文章を書かないかということであった。本来なら，怠惰を理由にお断りするのが良心的な態度だと自覚はしていたものの，その昔，マルセル・ミジョの伝記（1958 年）に接した時からの疑問が，1994 年に刊行されたステイシー・シフの伝記（邦訳，新潮社，1997）の出現によって氷解したと思われたので，その辺りの経緯を，「サン＝テグジュペリを支えた人たち」と題する文章として書かせてもらった。

その要旨はこうである。周知のように，サン＝テグジュペリの妻コンスエロに対する愛情は，まことにアンビヴァレンツなもので，愛し合って結婚したはずの二人の日常生活は，程なく阿修羅の世界の相を呈しはじめ，やがてある時期から夫は妻以外の女性に，妻からは得られない平穏と静寂を求めるようになる。こうした女性の存在は，まずミジョによって指摘されていたが，それ以後の伝記作者たちも，控えめながらこの女性の存在に言及している。いわばこの作家をよく知る人たちにとっては，公然の秘密とでもいうべき事実だったのであろう。

ところが，シフの伝記で，初めてこの女性が「B 夫人」という匿名ながら，その素性・生い立ち（identité）が特定されたのである。彼女は裕福な実業家の家庭の生まれで，美術学校を卒業し，20 歳で由緒ある貴族の海軍軍人と結婚している。そしてその結婚によって当時の政・財・官界に多くの知己を持つ若き事業家となった人物であり，サン＝テグジュペリとは 1929 年にルイーズ・ド・ヴィルモランのサークルで出会っている。以後，この作家を精神的にも財政的にも支え，1935 年からは生活をともにすることにもなる。彼女は作家の生前に彼の著作の「包括受遺者」となることを托され(のちにコンスエロとの係争関係に巻き込まれることになるが)，

『城砦』や『手帖』の公刊に余人の及ばぬ尽力をする。しかもこの女性は，1949年にこの作家の最初の伝記を発表したピエール・シュヴリエその人であり，同時に小説家エレーヌ・フロマンでもあることを，シフは明らかにしたのである。ガリマール社はプレイアード版『サン＝テグジュペリ全集 I, II』(1994，1999) を刊行しているが，その編者の一人ミシェル・オートランは彼女の協力と援助がなければ，この全集の刊行はありえなかったであろうと述べている。そういう意味では，つまりは，サン＝テグジュペリの書き残したものの後世への継承という点では，彼女はこの作家を内側から支えた最大の人物ではなかったか。

以上の経緯を，主としてミジョとシフの見解を紹介しつつ，私見を述べたものが拙稿の主旨であるが，他方，その後半において外側から彼を支えた人物として，レオン・ウェルトについて言及したが，ここでは関連がないので触れないでおく。

ところで，わが国のサン＝テグジュペリ紹介・研究の第一人者である山崎庸一郎氏は，この同じ『ユリイカ』特集号の中で，この女性の姓名をそれとなく特定しておられる (91 頁)。さすがという他はないが，換言すれば，筆者の怠惰がはしなくも露呈したと言うべきであろう。思い当たるふしもなくはなかったので，早速，伝記に関わる文献類を再調査してみたところ，表題に掲げた同じ著者の『サン＝テグジュペリ，星の王子の生と死』(フェラン社，1993 年。再版，2000 年。／邦訳『星の王子さまを探して』角川文庫，1996 年) の中に，«Nelly de Vogüé»という一節があり (約 5 頁，第 10 章)，そこでシフのいう「B 夫人」がネリ・ド・ヴォギュエであることが指摘されている。

思い返してみて，筆者が少し迂闊だったのは，1994 年刊のシフの浩瀚な伝記では，その前年に刊行されたこのウェブスターの著作に対する言及が皆無で，参考文献としても挙げられていないために，このイギリス人ジャーナリストの仕事を見逃してしまったらしいことである。しかし多少の疑点がないわけではない。その一つは，ここで書評の対象としている『コンスエロ伝』の「はしがき」によれば，ウェブスターがさる「航空界のヴェテラン」の仲介で，シュヴリエ (つまりB夫人) と会ったのは 1992 年のことだと述べているが，他方，シフは，邦訳の「訳者あとがき」によれば，3 年間にわたり 10 日間に相当する時間のインタヴューを行ったと述べているからである。刊行前の 3 年間といえば，1991 年前後からと推定できる。だとすれば，ほぼ同じ時期に，シュヴリエは二人の伝記作者と会っていたということにならないだろうか。それでいて，一方には姓名を明かしながら，他方では匿名に固執したのは何故か。あるいは又，前述のようにシフがウェブスターの著作を参考文献からも排除し，無視したかにみえるのは何故か。単なる不注意か，それとも

コンスエロの評価に異議があって故意に無視したのか，この辺りの詳細については，目下のところ筆者のよく知りうるところではないが，できればことの真相を知りたいものである。

ここらで，少し長すぎた前書きを閉じることにしよう。以下，表題のウェブスターの著作の内容とその検討に移る。

本書は2部構成をとり，その内容は第1部が出生からサン＝テグジュペリと出会う 1930 年までを扱い，その内容は第1章「火山の国」，第2章「メキシコ人大尉」，第3章「パリ随一の剣の使い手」と題された3章から成る。

まず第1章では，彼女が中米の最小国エル・サルバドルの小村アルメニアの生まれであり，この村がイザルコ火山の麓に位置していて，この小国が文字通りの地震大国であると同時に，革命の国でもあることが指摘されている。つまりは，自然災害や専制的リーダーたちの交代による混乱，破壊，無秩序，報復の繰り返しに，人びとはそれなりに対応しなければならなかった。こうした状況を神の懲罰と受け止めざるを得なかった人びとの多くは，神秘主義や魔女伝説，媚薬の存在を信じていると言われている。

こうした地理的条件の中で，コンスエロ・スンシンは父フェリックス・スンシンと母エルシリア・サンドバルとの間の長女として生まれた。その生年については諸説のあるところだが，著者は現存する出生証明書をつきとめ（その写真版コピーも掲載されている），彼女の誕生日が 1901 年 4 月 10 日であることを断定している。1931 年 4 月 22 日，ニースで提出された結婚届には 1902 年とあり，前夫エンリケ・ゴメス・カリーリョの傍らに葬られたペール・ラシェーズの墓地では，1907 年と記されている（そうである）が，そのいずれでもないことが判明したというわけである。彼女には 4 人の兄たちがいたが，いずれも彼女の出生以前に死没し，のちにドローレスとアマンダという二人の妹を持つことになる。母親はガテラマ出身のスペイン系の女性で，父親は退役の大佐で有力者にも顔がきき，多少の魔術の心得もあった。二人はコーヒー園を経営し，村では裕福な層に属していた。

1919 年，18 歳で小学校教諭資格をえた彼女は，国から奨学金をもらってメキシコに留学するが，翌 1920 年，英語を学ぶためにサンフランシスコに 2 年間滞在する。その間，2 歳年長のリカルド・カルデナスというメキシコ陸軍大尉と出会い，1922 年 5 月結婚する。しかし，カルデナスはその翌年，鉄道事故で早々と死亡。他方，故郷のアルメニアには父親の決めた正式な婚約者ビラロボスがいて，彼女は寡婦となってそのもとに戻るが，この年，その父が心臓病で死亡したこともあって，結局この男とは縁がなく，1923 年彼女は再びメキシコに出る。

ここでコンスエロは，ある著名人との出会いを経験する。それはホセ・バスコンセロス José Vasconcelos（1881－1959）との出会い，そして彼の愛人となったことであろう。その関係はサン＝テグジュペリとの結婚の時期まで，間歇的に続くのである。

バスコンセロスとはいかなる人物なのか。まずは『ラテン・アメリカを知る事典』（平凡社，1987）の記述を引用しよう。そこには「メキシコの政治家，思想家。1907年弁護士となる。メキシコ革命勃発とともにマデロ運動に参加。のちメキシコ国立大学総長および文部大臣を務め，教育の近代化に尽くした。（・・・）29年大統領選挙に出馬し，敗れて亡命したが40年に帰国。（・・・）」とある。ウェブスターも「ラテン・アメリカ文化発展の中のメキシコの灯台」とも「メキシコのピタゴラス」とも「ジュール・フェリー」とも呼んでいる。多くの若者たちの畏敬の的でもあったらしく，その意味で「サルトル的人物」とも評しているが，この比喩はやや不適切だと思われるものの，相当な人物であることに間違いはないであろう。

二人のなれそめについてのウェブスターの説明は省略するが，コンスエロがバスコンセロスに惹かれて関係を持つにいたるには，次のような価値判断があったようである。これは著者がコンスエロの発言として紹介しているものである（31頁）。

«Il vaux mieux avoir le cinquième d'un grand homme que la totalité d'un homme médiocre. »

日本語に訳せば，さしずめ「くだらぬ男と結婚するより，一流の男の妾になるほうがよい」というところであろうか。明治の元勲たちを陰で支えた女性たちを，それとなく彷彿させる言辞でもある。

政治的野心の強いバスコンセロスは，地方総督選挙に立候補するが落選。一時故国を離れることが得策と考えた末，1925年11月，家族をつれてパリに居を移す。彼のあとを追う決心をしたコンスエロは，メキシコからパリまでの旅費を彼に送らせ，1926年1月パリに到着，二人は再会する。しかし，妻子を抱えたバスコンセロスには，家族を捨てて彼女と再婚する意思はまったくなく，また反メキシコ政府側の亡命者たちとの会合などで忙しくコンスエロを満足させることはできなかった。そこに登場するのがグアテラマ出身でアルゼンチン国籍のジャーナリスト，エンリケ・ゴメス・カリーリョ（Enrique Gómez Carrillo, 1873-1927）である。フランス人との混血である母親と仕事熱心な父親をもつこの男は，18歳でパリに姿を現し，ジャーナリストとしての才能を発揮する。二度の結婚と離婚を経験するが，その情熱は剣の使い手としての名声に負うところ大であったらしい。ウェブスターによれば，18回の決闘に挑んだという。そして「パリ随一の剣の使い手」という評

判を得ていた。その相手の中には，アクシオン・フランセーズの指導者シャルル・モーラスもいたとのことである（56頁）。

ともあれ，野獣派の画家キース・ヴァン・ドンゲンの仮装舞踏会でコンスエロに出会ったカリーリョは，彼女に一目ぼれ。結婚に至るまでにはバスコンセロスとのあいだに紆余曲折もあったようであるが，1926年12月二人はニースで結婚する。しかし，働きすぎと放蕩のせいか，わずか11ヶ月後，彼は脳溢血で倒れ，54歳で死亡する。マドレーヌ寺院での葬儀，ペール・ラシェーズでの埋葬には，コンスエロのあとにメーテルリンクが従い，またフランス政府を代表して時の文相エドワール・アンリオが臨席していた，とウェブスターは伝えている

コンスエロがカリーリョとの結婚と，その慌しい死によって得たものは，プレイアード版全集Ⅰの年譜に記されているカリーリョの全財産〔1．アルゼンチンの地所　2．南仏シミエ（Cimiez）の別荘　3．カステラーヌ通りのアパルトマン〕だけではない。生前のカリーリョが培っていた貴重な人脈・交友関係を手に入れたのである。とりわけベルギーの作家モーリス・メーテルリンク，イタリアの詩人・小説家ガブリエーレ・ダヌンチオをはじめとし，ピカソ，ダリ，ミロなど多くの芸術家たちに知己を得たことを意味する。つまり，この時点で，コンスエロは生活の心配から開放されるだけの財産と，余人には得がたい人的財産を手中に収めたのである。カリーリョの死後は，バスコンセロスとよりを戻すこともあったようだが，かくするうちに，彼女は，才能はあるが未だ無名の一人のパイロット作家と出会うことになる。

第2部は第1章「空中での接吻」，第2章「ネリ」，第3章「星の王子」，第4章「アフリカ狐・ドニ・ド・ルージュモン」の4章から成り，彼女の3番目の夫となる男との出会いから，1979年の南仏グラースでの死にいたるまでを追っている。

第1章は，1930年9月，折からアルゼンチンへ向かう途上のコンスエロが，ブエノスアイレスでの「芸術愛好者の会」の集まりで，サン＝テグジュペリと出会う場面から，結婚に至るエピソードを扱ったものであるが，すでにいくつかの伝記に記されている以上のものはなさそうである。ただ，バスコンセロスとのくだりで述べたように，「一流の男」にこだわり続けたに違いないコンスエロにとっては，『南方郵便機』を世に問うただけのこの「熊のような」パイロットの将来を保証するものが欲しかった。そこで，その判断をメーテルリンクに求め，彼から絶大な賛辞を得て，いわばそれを担保としてサン＝テグジュペリとの結婚に同意した。自己の判断ではなく，他人の判断を求めたところに，やや厳しいことを言えば，彼女の限界を感じさせないでもない。しかし，ウェブスターの伝えるところによれば，後年彼

女は「パイロットの妻になることは，犠牲を受け入れることであり，作家の妻になることは，真の殉教者になることだ」(78 頁) と述懐していたとのことであるが，この発言は，彼女の描いていた幸福な妻のイメージと「一流の男」の妻の現実との乖離を，それなりに身をもって体験した者の，失望とも不満とも怒りともとれる率直な告白とみるべきであろう。

ウェブスターが，二人の結婚生活の不和と破綻の責任の一端はコンスエロにあるとしても，サン＝テグジュペリの側にもある，と言うのはその通りかもしれない。コンスエロの浪費癖，気まぐれ，男性遍歴のうわさなどは，貞淑な家庭の主婦を求めていたらしいサン＝テグジュペリを悩まし，彼の家族の激しい攻撃の的となったが，コンスエロの側からみれば，夫の飛行機一辺倒の生活，加えてその女性遍歴も中々のものだったと反論するであろう。ここで二人の異性関係に深入りするつもりはないし，またそれ程の関心もない。しかし，本書の第 2 部第 2 章で大きく扱われている「ネリ」こと「ネリ・ド・ヴォギュエ」なる女性は，コンスエロにとって無視しえない存在であった。以下，ウェブスターの記述を追ってネリ夫人の素性を補足しておこう。彼女の結婚前の姓名はエレーヌ・マリ＝アンリエット・ジョネ (Hélène Marie-Henriette Jaunez)。父親マクシミリアン・ジョネは，普仏戦争後ドイツに併合されたロレーヌ地方，モゼール県生まれ (1873 年) の，陶器産業を営む実業家であり，娘のネリはその父親から旺盛な企業家精神を受け継いでいた。ネリという名は，彼女のアイルランド出身の乳母がつけた愛称のようである。

莫大な持参金を携えて，20 歳の彼女は「フランスの最も裕福かつ由緒ある貴族の一つ」ヴォギュエ家のジャン・ド・ヴォギュエ伯爵と結婚し，当時のフランス各界の有力者のあいだに広く知己を得ていく。同時に父親の事業を引き継いだ彼女は，ヴィシー政権の大物，ピエール・ラヴァルの甥ルネ・ド・シャンブランやポール・クロデールの息子の一人アンリなどと協同して，アメリカでの事業の拡大を図っていた。夫のジャンとのあいだに一人の男子を設けたが，1935 年以後，この夫婦はそれぞれの道を歩むことになった，とウェブスターは述べている。

1935 年に何が起こったのであろうか。それは懸賞金目当てに，パリーサイゴン飛行時間更新を目指して，ブールジェ空港を飛び立ったサン＝テグジュペリがリビア砂漠で遭難した事件である。この時の搭乗機コードロン・シムーン機は，この一種の冒険飛行のために，彼が手に入れたものであるが，当時の彼は借金で執達吏に追われる身であったから，シムーン機の購入資金源については種々の憶測を呼んでいた。おそらくはネリからの贈り物だったのであろう。さらに，遭難後直ちに現地に駆けつけたネリの対応のよさに，あとからカイロに到着したコンスエロが，驚き

かつ落胆したと，彼女の数少ない女友だちの一人マドレーヌ・ゴワゾは証言している。

以後，アントワーヌとネリとの関係は半ば公然のものとなる。「彼女は半ば正式にサン＝テグジュペリの第二の伴侶となることによって保守的なフランス社会に挑戦した」(98 頁)のである。アントワーヌの周辺ではコンスエロとの離婚を促す声が高まり，コンスエロの側でも弁護士を立てて対応したようであるが，ウェブスターによれば，アントワーヌは「結婚は最大の秘蹟」だから破ることはできない，という理由で拒否したという。貴族出身のこのパイロット作家は，コンスエロに対する愛と憐憫を断ち切れなかったのか，それとも自ら選択した行為の結果と責任を回避すべきではないと，判断したのであろうか。ともあれ，離婚する道は選ばず，1937 年以降，約 5 年間の別居生活を続け，1942 年ニューヨークで二人は再会する。

次のネリの発言はアントワーヌとの関係についてシュザンヌ・ウェルトに答えたもので，シフの伝記でも引用されているところだが，アントワーヌ，コンスエロ，ネリの三角関係のおよその内実を示すものであろう。「アントワーヌはコンスエロをまるで娘のように扱い，彼女は彼に対してまるで子供のように振舞っていました。私はといえば，私の役割は彼に母親として接することであり，本当に彼を愛していましたので，彼が義務を遂行し，勇気ある言葉で敵対する世界に立ち向かうまえに，彼を強固にし万全の状態にしておくことでした」(111 頁)。

ところでウェブスターは，ネリやシモーヌ（アントワーヌの 2 歳年長の姉）のコンスエロ非難を激しく攻撃しているが，とりわけネリがピエール・シュヴリエというペンネームで発表したアントワーヌの最初の伝記（1949 年刊）が，まったくの「聖者伝」で，いわゆる「サン＝テックス神話」の醸成には貢献したかもしれないが，この作家の実像を世に伝えるという点では，計り知れない誤りを犯した，という視点を譲らない。

ことの原点は『城砦』の評価にあるようである。ウェブスターは次のように述べている。ネリが「その中に天才の資質を予感していた文章のいくつかは，じつは単なる《意味論的・哲学的演習》(un exercice sémantique et philosophique) に過ぎず，その複雑さと聖書調の文体は，再度の読書を促すものではない」(106 頁)。また，1943 年北アフリカを訪れた際のある時，ネリが「『城砦』を書いている時のあなたは，いくらかキリストさまのようよ」と言ったと述べ，彼女の目には，アントワーヌの欠点ですら美徳のように見えたのだ，とやや皮肉ともとれる記述をしている。

他方，ウェブスターが力点を置くのは，『星の王子』を書いたサン＝テグジュペ

リである。まず，そこにはネリの影響がほとんど見られない。逆にコンスエロの影というか，影響が顕著である。その例として彼が列挙するのは，次の 3 点である。まず王子の住む天体に二つの活火山と一つの死火山があるのは，1938 年グアテラマの事故後，コンスエロとともにエル・サルバドルのアルメニア村を訪れた際の，イザルコ火山の印象の強さを示すものであり，次いでバラの花はコンスエロその人の象徴に他ならず，加えて「かんじんなことは，目には見えないんだよ」という名言を吐く狐の原型は，アメリカ亡命中のアントワーヌ，コンスエロが親しくしていたドニ・ド・ルージュモンではないか，というのである。総じていえば，『星の王子』全篇に横溢するファンテジーこそは，コンスエロのもつ最大の特色であり，彼女の存在なくしてこの作品の誕生は考えられない，というのがその主張のようである。

晩年，アントワーヌは『星の王子』をコンスエロに献呈したかった，と母親に洩らしていたというエピソードが伝えられている。しかし，ウェブスターの伝えるところでも，ニューヨークで再会後の二人が平穏な生活を送り，協同して夫の作品の完成に努力していたというのではなかった。二人は以前と同様の勝手な生活を送り，ついに，アントワーヌは若い控え目なアメリカ人女性シルヴィア・ハミルトンのもとに転がり込み，『星の王子』の自筆原稿を彼女に贈っている。他方，コンスエロはルージュモンと生活をともにするというありさまであった。中々に激しい夫婦だという他はない。1945 年，のちにコンスエロがマドレーヌ・ゴワゾに告白したところによれば，彼女はルージュモンの求婚を断り，故郷のエル・サルバドルに戻ったところ，フランスの国民的英雄かつ著名な作家夫人として，国をあげての大歓迎を受けたとのことである。

1960 年代以後，彼女はその時間の大半を絵画と彫刻に費やした。住まいは，アントワーヌの母親マリの住む南仏カブリに近いグラースにあった。その家を「マス・サン＝テグジュペリ」と名づけ，持病の喘息の養生をしながら，1979 年 5 月 28 日，そこで最後の息を引き取ることになる。 死の直前，彼女はその全財産，および著作権，加えて彼女が引き継いだアントワーヌの著作権までも，彼女の秘書ホセ・マルチネス・フルクツオーソに贈っている。ホセはそれらをことごとく競売にかけてしまったとのことである。

最後に，本書では多くの未刊の書簡が引用されているが，参考文献は挙げられているものの，その出所が明示されていないことに，やや不満が残る。なお未読ではあるが，本年プロン社からコンスエロの著作『バラの記憶』が出版された。果たして，コンスエロは甦るのであろうか。